

温泉コラム

● 第 10 回 ●

「離島編」

医療法人福寿会 日野病院薬剤部

河野文昭

(温泉ソムリエ・温泉保養士・温泉入浴指導員)

1. 温泉のある離島

北海道には509もの離島があるそうですが、人の住んでいる離島はそう多くはありません。奥尻島、天売島、焼尻島、利尻島、礼文島の五島が定住者のいる島だそうで、そのうち温泉が湧出し、また公共の温泉施設を有しているのは奥尻島、利尻島、礼文島の3つだけのようです。容易な話ではないでしょうが、国後島と択捉島にもかなりの数の温泉が湧出しているようなので、自由に入りに行ける日が早く来てほしいものです。

私は奥尻島、利尻島、礼文島のいずれにも行った事はあるのですが、礼文島に行ったのはもう随分と前の話で、当時はまだ島内に公共温泉施設は

出来ていませんでした。現在ではフェリーターミナル近くに「うすゆきの湯」という施設が公共浴場として運営されており、その近くの「ホテル礼文」でも同源泉と思われる温泉に入る事が出来るようです。実際に入ったわけではありませんが、泉質はナトリウム/塩化物・硫酸塩泉との事で、温度も50℃前後との事。道北では珍しい高温の温泉という事になります。公式HPによると掛け流しでの提供らしいので、なかなか行く機会を作るのは難しいですが、もし行く機会があれば是非入ってみたい温泉ですね。

2. 利尻島には2つの温泉がある。

利尻島に関しては島内に2つの温泉が湧出していますが、2年ほど前に訪れた際には移動時間の都合で島内での宿泊が叶わず、2つの内1つしか入る事ができませんでした。この時、私が入ったのは杓形(くつがた)地区にある利尻ふれあい温泉であり、もう1つは鴛泊(おしどまり)地区にある利尻富士温泉といます。

利尻富士温泉は利尻島の玄関口ともいえる鴛泊地区にあり、日帰り入浴の施設の他、温泉を使ったプールなど、レクリエーション施設としても整備されています。泉質は比較的扱いやすい薄めのナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉で、温度は41.3℃との事。浴用としては冬季は加温が必須でしょうが、見た目も透明らしいので、温水プールとして使うには最適な温泉と言えるのかもしれない。



参考資料①：離島の楽しみといえば温泉以外にも…。海産物に舌鼓を打つのもアリ。

結局私自身は未だこの温泉には入れてはいないのですが、公称されている泉質から察するに、比較的万人受けしやすい温泉なのではないかと思われま

す。続いて、実際に入った事のある利尻ふれあい温泉の方ですが、こちらは杓形にあるホテル利尻にて入る事が出来ます。泉質面では利尻富士温泉とは対照的に、かなり個性的な特徴を持つ温泉となっています。

この温泉の正式な泉質名は含炭酸・ナトリウム/塩化物・炭酸水素塩泉で、泉温は33.4℃と若干利尻富士温泉よりもぬるく、加温での提供となります。しかし成分総計では13260mg/kgを記録し、オロロンライン沿いの温泉達に並ぶ、力強い高張泉となっています。個別の成分に目を向けると、鉄(II)イオンを15.3mg/kg程含んでいる事から、色は一目で判る赤茶けた鉄泉の色を呈しており、炭酸水素イオンは3393mg/kg、炭酸ガスに至っては1105mg/kgと、道内でも屈指の炭酸泉という側面も有しています。

総合的に利尻ふれあい温泉の特性をまとめると、

- ①身体を強く温める強塩化物泉
- ②同じく身体を温める鉄泉
- ③高い血管拡張作用を持つ高濃度炭酸泉
- ④保湿・皮膚軟化作用のある重曹泉

以上のような複数の性質を併せ持つており、実際の浴感としても、浴槽温度はそれほど高温ではないにもかかわらず、浴後には強い発汗が現れ、こ

れが浴後かなり長い時間持続したのが印象的でした。舐めれば強い塩味と同時に鉄泉由来のエグ味があり、多くの炭酸泉に香る金気臭もあります。塩分と同時に重曹成分が多い事から、入浴直後の肌触りはツルツルとしており、指と指の間に湯を絡ませると、高濃度の塩類泉でも感じられるとろみにも似た独特の手触りがありました。また、一部の浴槽では加温を最小限に留めたほぼ源泉に近い状態でのお湯張りがしてあるため、炭酸ガスの血管拡張効果を最大限に得られるようになっていた点も好印象でした。

この他、日本海を一望できる露天風呂のロケーションも大変素晴らしく、私の様な泉質にうるさい温泉マニアから、一般の観光客にも幅広くお勧めできる温泉である事は間違いなく、利尻島に行く際には是非立ち寄って頂きたい温泉になります。

3. 奥尻島最後の秘湯・神威脇温泉

震災による津波被害で島の人口減少が度々テレビで取り上げられる奥尻島ですが、観光産業の不振からか、唯一の温泉宿泊施設であったホテル緑館までもが閉館し、それに伴って瀬棚と奥尻を繋ぐフェリー航路も廃線となってしまいました。この航路は昼14時台の便があった事から、個人的には比較利用しやすかった気がするのですが、廃線になってしまった事で、奥尻島へのアクセスは事実上、江差便のみとなってしまいました。



参考資料②：神威脇温泉の浴場の様子。窓から海の景色が一望できる。浴槽から溢れ続ける掛け流しの湯にも注目したい。



参考資料③：神威脇温泉外観。長年の風雪でかなり老朽化しており、存続が危ぶまれる。

このように札幌方面からはかなりアクセスが難しくなった奥尻島ですが、ここにも忘れてはならない至高の一湯が存在しています。その温泉の名は神威脇温泉といい、閉館したホテル緑館から坂を下って徒歩数分の所に今もひっそりと残っている筈です。北海道の中でも特にアクセスしにくい秘湯の1つといえるでしょう。

神威脇温泉は成分総計12350mg/kgのナトリウム・カルシウム/塩化物泉で、63℃の源泉を掛け流している温泉です。露天風呂はなく内湯のみですが、浴室はガラス張りで夕日の沈む日本海を見る事が可能で、どこか郷愁を感じさせる、独特のロケーションを有した温泉となっています。塩類泉であると同時に5.2mg/kgもの鉄(I)イオンを含んでおり、湧出時は透明ながら、曝気した浴槽のお湯の色は赤茶色く変化していきます。香りは礫と鉄の匂いが混じり、モールっぽさはなく、溶岩の気配を感じさせる温泉です。

海風や雪により老朽化した建物の雰囲気から、古くから島民達の身体を温め、冷えと疲れを癒してきた事が窺い知れます。また奥尻島は大陸とも近い国防の要所でもあり、駐在する自衛隊員の方々からも愛用されてきた筈です。離島の様な娯楽の少ない環境では、こうした温泉はしばしばレクリエーション施設としての役割りを併せ持つ事から、島の人々にとって、島外から来た自衛隊員と直接交流できる数少ない場所の一つなのかもしれません。

神威脇温泉は道内でも特にアクセスの難しい温泉であり、人口減少の著しいこの時代の最中において、特に存続が危ぶまれる温泉の一つとなっています。昨今のコロナ禍で特産の奥尻ワインもかなりの打撃を受けている事でしょうし、是非とも支援の手を差し伸べてほしいと思います。

4. 最後に

今回は離島編という事で、少ない記録と記憶をかき集めての記事となりました。自然やアクティビティの類が注目されがちな離島ですが、蓋を開けてみればどの島にも源泉掛け流しの、しかも貴重な泉質の温泉があり、少しでもその魅力が伝われば幸いに思います。

北海道各地の温泉を紹介する一連の記事は一旦ここで区切りとなりますが、記事の掲載を斡旋してくださった札幌呼吸器科病院の雨宮先生と、私の自己満足な駄文に紙面を割いて下さった北海道薬剤師会の皆様には、深く御礼申し上げます。

今後の事はまだわかりませんが、これまでとは違った切り口で、温泉や公共浴場の魅力が発信できれば幸いと考えております。

それでは皆さん、良い温泉ライフを。